



1 司会者(主体的な学び)



2 ペア学習(対話的)



3 ノート展覧会(主体的)



4 班学習(対話的)



5 考察(深い学び)



6 教師の修正

子供たちが自由に会話をする時間をたくさんもつ。学力がつくだけでなく、生き方（多様な人と折り合う）を学ぶことができる。教師が前面（話し過ぎる授業）に出ると、子供の学ぶ力・学力・人間力はつきにくい。子供が受け身的になるからだ。



7 まとめのまとめ（深い学び）



8 振り返り（深い学び）



9 振り返りの振り返り（深い学び）



10 全学級内に学び方の掲示（問題解決的な学習方法）

■授業のユニバーサルデザイン

子供達は、授業者によって学び方の指導方法が違ったり、教科によって学習過程の名称が違う等、「学びにくさ」、「分かりにくさ」を余儀なくされていた。言い換えれば、子供が教師の授業方法に合わせていたということだ。多くの学校で、小学校であれば教師や学年ごと、中学校であれば教科ごとに、その授業観や授業方法が異なっており、これが学校全体の学力向上の妨げとなっていた。

その解決の方法は、「どの教科にも共通した学び方や学習過程」を校内で統一する事が考えられる。そのことにより、子供達にとって、より見通しをもち主体的に学びやすい環境が構築される。1時間の授業で、主体的・協働的な学びを行うことで、授業者の説明・指示・発問等の言葉が減り、本時のねらいの達成に焦点を当てた効果的な授業タイムマネジメントが可能になる。

日々の授業で、このような視点に重点を置き、教科の指導内容等を進めることで、子供達は、学び方の素地を身に付ける。深い学びができるようになる。より質の高い子供主体の授業を展開することができるようになる。各学校は、教師一人一人や教科等に任されていた授業をどの教科でも共通の学び方や学習過程を統一するとよい。